

# 會報



昭和八年三月十五日発行

通卷第二十六号

第4年 第2号

ども思ひ感ひながら湯沢で降りた。雪はほとんど總んで空も薄明るい。曾遊の三国街道をかつた。三国越らしに同勢十数人先行してゆく。勝手知つたゆるやかな登りを続けて七田切の部落からスキーを履く。メデイムがよく利いて樂だ。八時半近く頂上に立つた。不夜相寒い峠だ。直ぐ降りたかゝつた。去年の春、スキーを擔いで登つた時は相當の傾斜だつた記憶がある。杉の密林の中も無事に通り抜けて、早八木沢の小さな祠まで来てしまつた。こゝで清津川を渡り大嶋の部隊を後に餘々問題の鉢巻峠にかゝつた。一人旅かと思つて来たのに、慈恵の小屋へゆく途中も相當あると見えて十数人の一隊が、案内者を先登に勇ましく登つてゆく。新雪は三十センチ位だが、此一隊が先行してくれるのでもう心配はない。決心はして十日の夜の十一時三十五分のスキーリー車には乗つたものの、何となく不安があつた。水上で會社の同僚四人と別れて、愈々清水トンネルへかかると降つてゐる。さては、困つた事になつたと思ひながら、越後側に出でみると案外の小降で相當の遠望も利く。万一の場合引返すことなくなつた。

針葉樹會報 第二号

「苗場山の麓にて  
「ちや待つてますから来ませんか」電話  
の主は近チヤンだ。  
「行くつむりだけど……まあ、あてにしない  
で待つて居たまへ」  
と云つて別れたが、さてよく考へてみると相當な  
へ私にとつては）コースとなるらしい。芝原峠ま  
ではいいとして、それからの道が、もし新雪でラ  
ッセルとでもいふことになると到底一人の手に負  
へなくなる。さて……。

決心はして十日の夜の十一時三十五分のスキーリー車には乗つたものの、何となく不安があつた。水上で會社の同僚四人と別れて、愈々清水トンネルへかかると降つてゐる。さては、困つた事になつたと思ひながら、越後側に出でみると案外の小降で相當の遠望も利く。万一の場合引返すことになつた。

# 第四年第二号 鈎葉樹會報

「中の比較的樂ナルトを選んで登つてゆくのに、歩いて大した苦労もなく約三分の一程登つた処で、外の川の小屋番の一人だつた。それが運よくも松木さんと近藤さんと三、四日前から来て居られます。今日は神樂へ行かれました」。

「背の高いのと小さいのとか来てませんか」

「御二人だけです」

「今夜御厄介になります、ぢやまた」

そこから上の登りも、奥野シールの效力物凄くナッサと登れて難なく登りつめてしまつた。十時二十分、こゝから先は大した登降もなく、道は原始林を縫つて繞いてゐる。何と云へない感の激か湧いて来た。来てよかつたと思つた。二人が喧嘩くだらうと思つた。今夜は又三月のツアードを相談しやうと思つた。峠から約四十歩いた頃前立木がこまれて、此山奥には珍らしいコンクリート二階建へこれが東電の見張小屋だ。」の隣りにカツチリとした外の川の小屋が見えた。慈恵小屋隊の案内者の土地の若者は気軽な口調で「二人来てゐなさる御客さんのお友達、今夜泊るつて」

「どうぞ御上んなすつて」

小屋主の小鷹ゆき女は、見るからに生々とした。若さと働き盛りといった風の張つて居る女だつた。其應接は、実に感じがい、していふ形容に盡きる。其小屋には温いものが満ちてゐるのを感じた。恰度十一時だつた。(続く) (七矢衛)

## 登山者のメルカ、ツエルマット(二)

然し乍ら衆も角も次第に入々の山岳の美に対する理解は進んで来た。就中ルツリーの影響は大きかつた。彼は都會に於ける過渡文明の背理に怖れ汚れあき自然への福音を説き、斯くて山地に於ける簡素なる生活への行進へ道徳的根據を與へたのである。

之に続いてソーユールの山岳記述が出た。彼は一七八九年及び一七九二年の兩度、テオディユーハーク、バイロン、バッゲゼンマチソン、ピルケル、シエリ、ハーラー、シャーラー、ゲーテ等の詩編は十九世紀の中葉に至り益々多くの踏襲者を見出しつた。斯くてフランス革命及ナポレオン戦争後の平和時に於て一般より有福な人々によつてスキス巡遊と

いふ事が一つの流行となつて來た。彼等はリギー、フヒヤ、ワルトシユテツテルゼー、ベルナーオー、バーランド、シャモニーそして彼のモンブランに迄も足を延ばして行つた。

次に郵便馬車とアルプホルン吹きの物語的時代が来た。殊に後者はベルナーオーバーランドに於て其の高いエローを人々の上に響せて居た。而して此の時代は人々が自分の遊んだ場所の名前を狂喜的に山杖と焼付けさせて居た頃でもあり、又一方に於て山を愛する情感的な若者達が崇高な気持を懐いて、儼然と雪冠を戴く山々を山麓より見上げて居た美しい時代で、もあつたのである。

勿論それだけに満足してゐる人々もあつた。而も一八五〇年の初め頃にあつては鉄道は未だバル及びジエネヴァまでしか開通して居あかつた爲、純然たる山岳地帯に進入する爲には馬車に乗る必要があつた。其の上又當時は主中心地のみに多居なかつたのである。斯くの如き状態にあり乍らフルカの峠には極く骨の折れる驟馬位しか通つても、长途の旅行に際し、何かやらうといふ氣持方が湧き出したり、郵便馬車旅行の物語りや談話、冒險小説など、今日汽車の狭い特別室に居るより

も、ヨハ以上にその地方を楽しんで居たといふ事は全く不思議に思はれるのである。

さてツエルマットであるが、此處は他地方と比べて二重に遠隔の地となつて居た。即ち嘗つてはかの炎熱焼くが様なローヌ河を歩き、それが終つたと思ふと次には又三十五粍の長い嫌なグイスツ谷の驟馬道を喘ぎ登らねばならなかつたのである。谷の驟馬道を喘ぎ登らねばならなかつたのである。従つてわがく此処まで迷ひ込んで来るといふ物好きは全く無かつたのであつた。

一八三五年に有名な氷河学者アガシーの一行と共に地質調査に赴いたカールヴォクトは其の當時の状況を次の様に述べて居る。

「ゲアリスの南部にある側渓へ即ちゲイスピ谷の事」は當時殆ど世に知られて居なかつた地方であった、全くの原始状態を保つて居た。究で文明の事は當時殆ど世に知られて居なかつた地方であつて、世界から世纪の過去の中へ不意に飛込んだふ感じであつた。禮拝堂や教會は沢山あるが、他のふたは唯粘土をぶつけた板とか苔蒸した尾根の載つてゐる塗めあ木小屋があるだけだ。坊主がその村で読み書きの出来る唯一人の人間であるといふ場合は稀ではない。彼は公証人であり、立法者であり、又医者でもあつたのだ。村人が徹夜をしなければならぬ場合にはよくその坊主の家へ行くので

第四年  
第號二  
針葉樹會報

ある。全く彼は村人には万能の神であった。衛生の点から云へば其処の住人は全くなつてない。と云つていゝ。村のお神さん達は大概肌衣は着て居る様であるがそれを取換へるのが年に二度、クリスマスと復活祭の時だけであるとの事だ。ツエルマットの人達は全で雨露だけをやつと防ぐに足る乾草の堆積の中で寐泊りするが、雨といふものが余り降らぬから彼等にとってはそれで充分なのが余る。最も困難な問題は糧食である。夏になると村人はパン、チーズ及び細長く切つて乾燥してある肉を常食とする。その肉ははじめ角の様に固いが滑かにしてからグリと呑み込んでしまふのである。暮し向きのいゝ人はバタも持つて居るが其のバタをさも自慢らしく申し示す。其れこそ十年も年を経た代物なのである。彼の自信あり氣な説明によると其れは葡萄酒の如く年を経る程良質となるのであつて、古い口ツケつオトチーズの様に歛が一面に生え、疏け易くなつたものは結婚式や小供の洗禮の宴席に於ける最も貴重な飾り物となるのであるとし（ニ一三頁）

外ノ川記  
アレジ ペンちゃんに云はす  
主し である体の僕が正  
大きい。処が謙ちゃん  
聞いた時は嬉しかった

パンちゃん云はすれば「身いやしくも一家の主である体の僕が正月出掛けられなかつた恨は大きい。处が謙ちゃんが町外ノ川へ出掛けると聞いた時は嬉しかつた。

处でパンちゃんを嘘分色々の手で誘つたけれども應ぢない。到々断念した处へ孫さんからの電訪である。二月七日火曜日の晚出发と聞いて孫さんのが「チ卫うまくやつて居ながら」と云つた。此時相手がパン公だつたら「どうだ・ざまみろ。身いやしくも一家の主だつてたまには五日間も山へ行けるんだい。罰當りめしなんて口から出たかも知れぬいが相手が相手だのでつどうです、如何なもんをせう。相當なもんをせう。お出になりませんか?」と代つた。处が孫さんは例の通り大阪のメント聯合会に出席せねばならぬので拾参日には大阪だ、是れを知つて到底駄目だとは知りながら外交辞令を用ひて誘つた。途中崎があるが百米位の大したものでなし、なんて出鱈目を云つて居た。

第 四 年 第 二 号

を挫いてしまつた。さへ大変である。折角来てまだ何處の山へも脚目にからぬ前に此の始末、早く小舎に帰り冷して明日に備へた。

× × × × ×

今日は木曾屋敷一雁ヶ峯一清八右沢一慈大小舎一宿と云ふ足どりである。初て出發して二町程しか歩かないのに右足の挫捻位が痛んで痛んで止むやうになつた。休養である。あんまり得意になつて出掛け未だ罰だと思ふと我ながら情けない、然しだある。若しも此の五日間何處へも行けなかつたら東京へ帰つて皆々様へ申訴なのは勿論あんまりだらしがなうすぎる事となるので九日一日は真劍になつて足を冷した。処が神も哀れみ給ひてか其の夕方から歩行はどうやら出来る様になつた。

宿の小鷹氏とも大分親しくなつてアバンドリの話を聞いたり國際聯盟脱退の議論を耳聴したりして楽しかつた。

愈々今日は決死である。登ればえすれば後はこちらのものである。足は到底ボーゲンには堪えられないと云ふ考へである。

× × × × ×

昨夜小鷹氏は「バンドリ」を打ちに出掛けで数時間しか寐て居ないので疲れてぶら／＼歩いてくるので、こちとら大助りである。

今日は宿一慈大小舎一清八左沢一神樂峰北方の頂一雁ヶ峯一黒岩沢一清八右沢一ハライ川一宿と云ふ計画である。清八左沢のつめた処は雪はよし、雑木はなし、斜面はよし、全くの雪の樂園である。遠かに八海山、中岳駒岳や燧日光白根と何處でも見えある。

雁ヶ峯に来ると毛無山から見た時僅分遠くに見へ度鳥甲がすぐ目の前で見える、岩管山や横手山等も機方下手にとる様に見える。も、此處迄来れば足の痛みなんて問題でないが初て滑降となると驚いた一寸とも足が利かない、謙ちゃんは物凄い粉雪を立て、ぶん／＼曲りながら先へ見えなくなつた。此時迄痛くなしそれく早いや、も、夢中である。是なら轉ぶ時迄痛くなしそれく早いや、も、夢中である。あのゆるやかな尾根筋を無茶苦茶に飛ばした。近はよかつたが轉んだはずみに腰部を重ねて痛めてしまつた。もう日本政府の様に腹がすわつて居るので一寸とも驚かない、捻挫位平氣である、初て黒岩沢の上に来て見て驚いたよ、雪庇が出、下が見えない此の沢を下りるんだつてから折角すわつ

た腹が一部ピク／＼する。でもスキーは有難い、  
何んだかんだと小舎へ帰つて来た。

× × × × ×

今日の楽しみに残して置いた神樂ヶ峯である、  
二人で仕度も早い。途中慈大ヒユツテの上で一寸  
休んだきりで道はとても果取る。

大体昨日と同じ途をとつて滑ハ沢を登つた上から  
捨人位下りて来た、今朝慈大から出掛けた人々  
である。初めの二人位は相當に滑れるが大部分は  
岩原スキーコース組である。神樂ヶ峯へ行つた帰りと  
云ふ。こちらも元気を出して登つて昨日登つた  
少々い沢を右に見て尾根を登りつめた処へ来た、それから尾根  
今日は一寸も霧のため見えない。それから尾根  
を傳つて登ると先に帰つた連中は神樂ヶ峯の手前  
から灰つて居る、謙ちゃんは元気一杯でラッセル  
にして到々三角点の雪疵のある処迄へ来た。  
頂上の楽しい脚馳走へ元気見る／＼内に回復下  
りは途を代へて一度中ノ芝迄下り講八の左沢を横  
て遊んだ。こんな處は一日遊んで居てもよい処で  
ある。今月は時間が早いから是れから向山へ登ら  
うと話がまとまり一気く滑り下つた処へハライ川  
を越して間もなく突然目前を現れたものがある。

幽靈と思へば然らず足があり而もスキーをつけて  
居る。わあ!! 孫さんが来た!!

山で山の友に会つた嬉しさは格別なものである。  
何か持つて来たぞと直感した、果して彼は持  
つて来た、アマ酒の罐詰である。嬉しい哉。

此のアマ酒の罐詰に対する脚禮の「サービス」  
は何なんであるか。即ち今月是れから木曾屋敷迄案  
内致しませう、人夫衆のサービスは道案内である。  
それから勇氣百倍、一度小舎へ下つて休んでか  
ら、謙ちゃんを先頭にして大切な孫さんを中心に入  
れて僕が駆けりと云ふ人夫の「サンドイッチ」を造  
り、爾々として木曾屋敷目がけて上つた時、午后二  
時である。午后四時半此の「サンドイッチ」を食  
り、木曾屋敷へ近到着した、夕日と照り映えた  
八海の山々初々は大源太、仙ノ倉、谷川と美景を  
旦那へ御覧にいれて帰途へ就いたが何しろ人夫衆  
は神樂峯で食へてしまつたので旦那の疲労は物凄い。  
人夫衆大いに心配して愈々となれば謙ちゃんへ一  
時で置いて来てしまつたので旦那の疲労は物凄い。  
走りしてもらうつもりで下つたが後で旦那へ聞い  
て吃驚した、旦那は途中で駄目になつたら人夫衆  
へ背負つて貰うつもりあつたとの事である。

いくら人夫娘でも拾七貫の袋を背負つては滑れ  
ない、そんな馬力があるならサラリーマンなんか  
やめて三俣村から外ノ川へ米でも運搬した方が金  
になりやす。

初ても其の晩は旦那は確詰はおろか浮世の一切  
を忘却して一路熟睡の途をたどりまして人夫娘は  
無断でアマ酒を頂戴する理にむいかない。而も連  
休のスキーヤーが三十余人小舎に泊つたので大変  
な混雑である。

かの有名なる登山家角田某氏来りて泊る。

朝旦那から「アマ酒」を頂戴してお別れする。  
謙ちゃんと二人で木曾屋敷に登つて最後の山を楽  
んで晝から帰路についた。

(裡)

渡歐

大変御無沙汰して居ります、この三月二十四日  
い神戸を立ちまして欧洲へ参ります二年間程居りました  
ナホリで船を捨て、ミラノ行の急行へ乗ります。  
す。風かほるロンバルディアの平原へ行けば山の  
脊がするでせう。ミラノではこの前見なかつたデ  
ユオモト是非諸でたいと思ひます。テニソンのモ

ント、ロードガの詩の様か曉はなくとも、燃る様な  
ローズ・マーブルの夢を見る事は出来ませう。ラ  
ゴ、マギヨツレをかすめて、ドモドツソラ、脱兔  
の様に電気機関車はシンプロンへかけ込も事でせ  
う。緑の森と白い激流の繞くローヌの谷がいきな  
り目に飛込んで来ます。レツチエンの遂道を越へ  
て流星の如くカンドル、タルを走り下ればトウ  
ーンの湖だ。インタラーケン・オストのシーズン  
の外れのガランとしたプラットフォームにベントの  
ピッケルを片手に降り立つたエトランヂエーの胸  
は甘い五年前の恩出に一はいにかる。目に入るも  
の、耳に入るものの全て、子守歌の様に旅心をあた  
ためてくれるにちがひない。寒もなくとしたレツ  
チネンタルを上つて行けば、レースの様な雪  
をかつゝだアイガーのワンドが見れる。車窓から  
聞へて来るチーゲの鈴に、居ても立つても居られ  
たり窓から顔を出したりするだらう。

それから一週間、天気が許せばフンステラール  
木の頂に居るかも知れない。とけ始めた雪を  
割つて咲出したクローカスの花の中に一日中寝て居  
かも知れない。

何れ手紙を出します、こちらからも下さい。往  
所は又あとからお知らせします。

タ蘭タラケテ、大空アツムカレシ、おほらけく

ではさよなら  
山真青なり、心はろばろ、雲

### 四人の山の友

冬の山へ唯二人きりで登つたのは今度の飯豊が  
始めてだつた、何時も四人、多い時は六七人ナナヒンにな  
つて、其れに人夫も加へわい／＼云かて登つて行  
つた事もあつた、其して冬の山へは四人位が丁度  
適當したペーテイだと思つて登つて居た。

其れが今度の飯豊と金田と二人で登つた時は始  
めて四人の楽しさと二人の心細さを感じた、山の心  
奥深く、一日の行程も半ば以上進んだ時、例へば  
一人がスキーを折つたとか、怪我をしたとか、一  
重大なる行動を今更ながらに考へさせられた、夏と  
と違つて冬と云ふ変つた條件の下に於ける山だと  
危険率は非常に増して来る、一朝アエでもやつて  
来たら殆んど二人とも一所で雪の下に埋れてしま  
ふが是れでも四五人になると誰か一人は其の中で

助かつて残りのペーテイを掘り出して呉れる事も  
出来る。多人数のペーテイが事実雪崩でやられて  
も全部が其まゝ死んでしまつた例は殆んどきかない。

二人の登行に伴ふ危険から来る不安と心細さ又  
其こそ文字通り朝から晩まで四人だつた時の樂し  
さを始めて今度の飯豊行には未はされた。其れに  
つけても此の行に加はらない中島と磯野の二人が  
なつかしい。

中島君が病氣になるまで冬山は殆んど中島、金  
田、磯野、平塚の四人のペーテイで何時も登つて  
居た、学生時分は時間的には恵まれて居たの  
だからペーテイに加はれない理由があるとすれば  
金融的逼迫の問題しかありえない、是とても皆な  
夏の山は行かなくとも、冬の山はレと云ふ連中  
ばかりなんだから山行のためには外資を犠牲にし  
て冬中寒さでかるへながらも頑張った猛者も居る  
のだから冬のシーズンになると此の四人は大概誰  
とみななく持ちだしした山のプランに一致して何処か  
出掛けで登つてた、山の計画も比較的良く意見が  
まとまつた、其れと云ふのもクラスが同じと云ふ  
事に加へて夏の山の経験も、冬の山に最も必要な  
体力も、其れにスキーの技術も、此の四人は殆ん

と甲乙はなかつたから、中島の一わたりの理論的説明の後皆決まつてしまつた。松達が始めで登つた冬の山は例の尾瀬だつた、丁度松達が豫科三年の春誰にも指導されることなく、皆自分の力で自分達の夏山の経験をたよりて行つた、そして此の時は天候に恵まれたがペーテイの偉力を發揮し素晴らしい成功の數々を残し、三月の尾瀬入りの最初のペーテイと云ふ誇りへ持つて山から下りて来た。

其から四人は春になり冬になるときまつて揃ふて出掛ける様になり、殆んど大学を卒業するまで続いて来た。其れが今度はつくじと中島の病気、磯野の外遊に依り取り残されたクワルテットとして、二人は黙々としてスキーを運こばせ、なつかしい焚火の赤い焰を見詰めてか、何か遠く行つてしまつた。居るが上野や、飯田町に、山の出發を送るの違ひ、二ヶ年も向ふに行つて居るのでは名残惜しい、ものを思つて居る物足りなさを感じ、二人の口に一出るものはありし時代の四人の無邪気な逸話の一つだつた。

今此の逸話を物語つてせめて中島が昔の様に元気になつて、國家の干城しと自他共に許して居る如く、吾々ペーテイの先頭に立つて進んでくれる彼

の恢復と再起を希望し、又磯野のあの本場のアルプスで磨いて来る体験に依つて吾々ペーテイのレベルをより高く確成あるものとしてくれる此の二つの事が一刻も早く来たらん事を二人は静に待つて居る。  
(続き)

(はるを)

編 輯 後 記

森竹さんを旧暦フランスより迎へると間もなく、今度は新春早々吾が敬愛する磯野を英國におくること、なつた、針葉樹會員も是から先き本場のアルプスへ出掛ける事も益々多くなるだらうが、先駆者として後から行く者の為に頑張つて貢

ひたいものだ、  
送別會は三月十八日如水會館で行ふ事になつて居るが上野や、飯田町に、山の出發を送るの違ひ、二十三日、東京駅をツバメで立つ時にはもう、風大

K私達も送らう。

其から廿四日には、神戸出帆の船國丸に乗込み五月早々、もうスイスに足を踏み入れて居る。英國へ行つては機械其の他の貿易をやつて居る方、其こそ彼の祖父時代から關係のある英國人の處で

第 四 年 第 二 号

針葉樹 會報

修業するのが目的である。何れにしても英國とスイスで大部分生活するのだと推察して居る。  
次に城野は此の紙上で証文したいことは是非毎月一回以上、山の便よりも又普通の身辺消息でも結構、是非便りして貰いたい事だ、勿論此方からは會報を送るし、又其時々の山の失敗記など便利にする、森竹さんの時の様に消息不明の事は困るから。

では無事で、そして良き、發行を祈ります。

(追記) 英國の住所、昭和八年中

C/o. Messrs. Brown & Macfarlane Co.  
19, Saint Vincent Street Glasgow,  
Scotland.

會員記録

中川孫一外

二月十日夜 - 十二日

苗場山麓外

の川小屋を中心トスキーリング

二月二十五日 - 二十六日 上越銀岩原入

キーフ

宇佐美敏夫外

二月二十五日 - 二十六日 岩原入

キーフ

松木謙三、近藤恒雄

二月七日夜 - 十一日

苗場山麓外の川小屋を中心トスキーリング

村尾金二、曾田莊太郎

二月十日 - 十一日 伊

香保入キーフ

金田一郎、手塚晴雄

二月七日 - 十二日 飯豊

山スキーフ

金田一郎外

二月二十八日 湯沢スキーフ

河相薰

Box 1116 H. G. P. O.

Sydney N.S.W. Australia.

園山徳三郎

近衛歩兵第三聯隊第五中隊幹部候補生(赤坂山一ツ木)

高瀬進三

近衛歩兵第三聯隊第一中隊幹部候補生(赤坂山一ツ木)

吉澤一郎 芝区田村町一の田(地名改正)